

死刑について考えてみませんか

街を行くみなさん。

さる六月二五日、参議院選挙の公示日という日に三名の死刑執行がありました。この近くの東京拘置所でも六六才になる人の死刑が執行されました。

死刑の執行は、その日の朝に突然言いわたされます。家族への連絡も執行の後です。最後のお別れは望むべくもありません。

現在、死刑囚は「心情の安定」をはかるという理由で、死刑が確定した後は家族といえども限られた人としか会えず、それまで面会や文通をしていた友人・知人とは全く連絡ができなくなります。もともと身寄りがなかったり家族が離散している死刑囚の場合は、ある日突然やってくる執行の日まで、刑務官以外とは誰とも口をきくこともなく何年も独房の中ですごすことになります。

今度の「ビデオを見ながら死刑について考える集い」では、養子縁組して家族となった人たちとも面会・文通が認められないまま処刑されていったひとりの死刑囚が紹介されます。

面会を求める訴訟の判決も待たずに彼は執行されました。

……その日、私はいつもなら仕事帰りに買物をするために帰宅が六時過ぎになるのだが、財布を忘れているのに気がつきまっすぐ家に帰った。ドアをあけると狭い玄関に子供たちの靴が散乱し、電報まで落ちている。「ちょっと！お前達少しは片付けてよっ」と叫んでいると長男が飛んで来て、「あのね、すぐ〇〇に電話して下さい。Y兄ちゃんシッコウされたんだって」と告げる。

まさか。気が動転した。おそろおそろ電報をひらく。「Yさんのことで急用あり。至急電話乞う。東京拘置所庶務課長」

……庶務課長は大変ていねいだった。

「けさ、Yさんとお別れしました。はい。大変立派に落ち着いたものでした。一ところで、御遺体、御遺品については、どういたしましょうか」私はどう返事をしたか覚えていない。何を言っても言葉が消えていく感じだった。……「御遺体はこちらで火葬するよう手配しますけれども一」と庶務課長が言った時、意識がはっきりした。「合わせて下さい。お別れをさせてください。こちらで葬儀はやりますから！」（養親になった方の手記より）

いつ訪れるかわからない執行を逃れようもなく待つ死刑囚の孤独な日々。外部の人と接触させれば「心情の安定」が損なわれるという法務省。死刑囚は社会から幾重にも隔離されて、そして執行されていきます。そんな死刑の現実を見つめ、考えてみませんか。